

# 本居宣長・平田篤胤の主張 20221127保立道久

- 日本神話の至上神はタカミムスヒ・カムミムスヒ

- 『古事記』冒頭の天地創造の至上三神

- ①天御中主・②タカミムスヒ・③カムミムスヒ

- 天御中主は一〇世紀頃以降、伊勢（外宮）神道の祭神として神道の最高神であった。

- 宣長はこの天御中主を作り物として排除し、本来の神話の至上神（「裏」にいる実際の神）にムスヒ二神を格上げした。

- **宣長の問題点ーームスヒ神と天照大神の関係が曖昧。**
  - **天照大神を皇祖神（「表」の至上神）とした。**
- 国家神道は宣長の問題点を拡大し、ムスヒ二神を排除し天照大神のみを至上神とした。。
- しかし、**宣長のムスヒ二神至上説が正しいことは日本神話学の共通認識。皇国史観の克服はアマテラス中心主義の克服から再出発する必要がある。**
  - 菊地照夫のタカミムスヒ論によって、それが改めて確認された状況。

- これを学説として体系化するためには天御中主を処理することが必須。今日の課題。**しかも、それは歴史天文学に直結する。**
- 天御中主は天武の意思の下に、太安麻呂が『古事記』冒頭で至上神にもってきた道教的な神で実態は北斗の神。
- それ以前の建国の神はムスヒ二神。
- カムミムスヒは五世紀に流入した韓式竈をベースとして生まれた竈神「蒸す火」の女神であり、火山の女神（阿蘇・雲仙？）。
- タカミムスヒの名はそれを前提としたつけられた、高所にいる「熱い光・日」の神、ゼウスのような**雷神**。

## ①天御中主は天の真中の北辰の神

- 「天御中主を以て北極帝座之星となす」（一条兼良『日本書紀纂疏』）
- 「御中」は神聖な中央の意（西宮一民）。

### 前提となった神。イサナミが生んだ北斗の神、久比奢母智神

- 「杙瓠」—「瓠」（ヒサ）に「杙」（クイ=柄）の（西宮一民）
- 北斗をクサキ星。「クヒヒサークヒザキークサキ」か（北尾『日本の星名事典』）
- クヒザモチのモチは、大日靈貴・大穴貴と同じ尊貴な神につける神名語尾。
- しかし、至上神ではなかった。倭国の伝統の中で存在した「星」の神



## ②造化参神の道教的枠組みと篤胤の「天御中主＝太一神」説

- 『古事記』の安麻呂は第一級の道教学者
  - (福永光司『道教と古代日本』一九八七)
  - 六朝時代の道教書『九天生神章経』に「三気の尊神」→『古事記』の造化三神
- 天御中主は「上皇太一神」「天皇大帝」(北斗の神)にあたる。

### ③天御中主と韓系官人

- 天御中主は奈良時代の官僚の主流、韓系氏族の祖神として受け入れられていた。
- 諸司官人の所蔵する「倭漢惣歴帝譜図」
  - 「天御中主尊を標して始祖となし、魯王・呉王・高麗王・漢高祖の命などの如きにいたり、その後裔に接す。倭漢雑あえて天宗を垢す。愚民、迷執し、たやすく実録を謂う」
- **桓武は、これらの系図の焼却を命じる。**
- ①百済王の血を引く自分と百済王族のみを尊貴とする。②役人は日本の官人になれ、

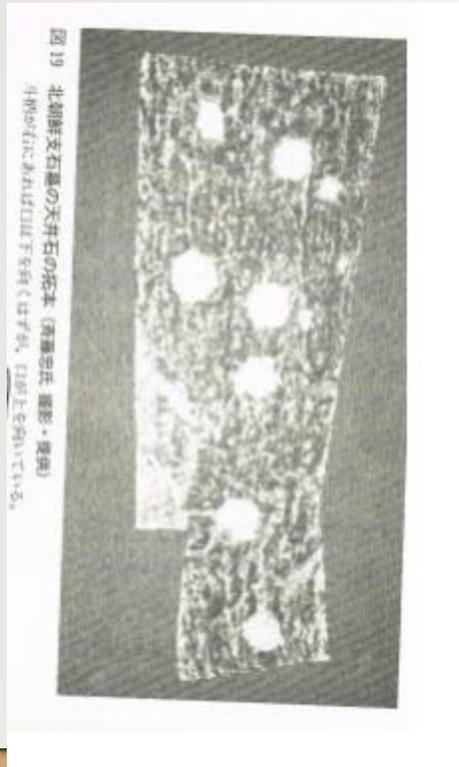
## ④天御中主の伊勢への転生

中臣氏が天御中主を祖神に戴いた。

- 藤原氏は中臣鎌足が死の直前に大織冠、内大臣に任ぜられ、藤原と賜姓されたところから出発した氏族である。本来の祖神は天児屋命（本拠地の摂津島上郡兒屋郷に由来）。
- しかし、藤原氏は奈良時代に准皇親というべき地位で王権の一部に入り込み、それとともに、自己の祖神を高御産巢日・神産巢日と並ぶ津速魂命というムスヒ神だと主張。これにより、本来のタカミムスヒ・カムミムスヒの地位は低下。アマテラスの地位が高まった。
- 中臣氏は藤原氏の動きに呼応して天御中主の裔であると称す。
- 神祇官を主導し、伊勢の祭主となり、神道神学には天御中主が残った

# 追加——雷神タカミムスヒ

- タカミムスヒの持物としての「羽羽矢」（雷電矢）
- タカミムスヒの降す剣。雷電剣



# 珍敷塚古墳の「月の船」の宇宙観

(1) 天の海に 月の船浮け 桂梶  
懸けて榜ぐ見ゆ 月人壮子  
(2223)

(2) 秋風の清き夕に天の川舟漕ぎ  
渡る月人壮子 (2042)

(3) 大船に真楫しじぬき海原をこ  
ぎ出で渡る月人をとこ (3611)

(4) 山のはのささらえをとこ天の  
原門渡る光見らく良しも

(5) 奥つ国領く君が染屋形 黄染  
の屋形 神の門渡る (3888)

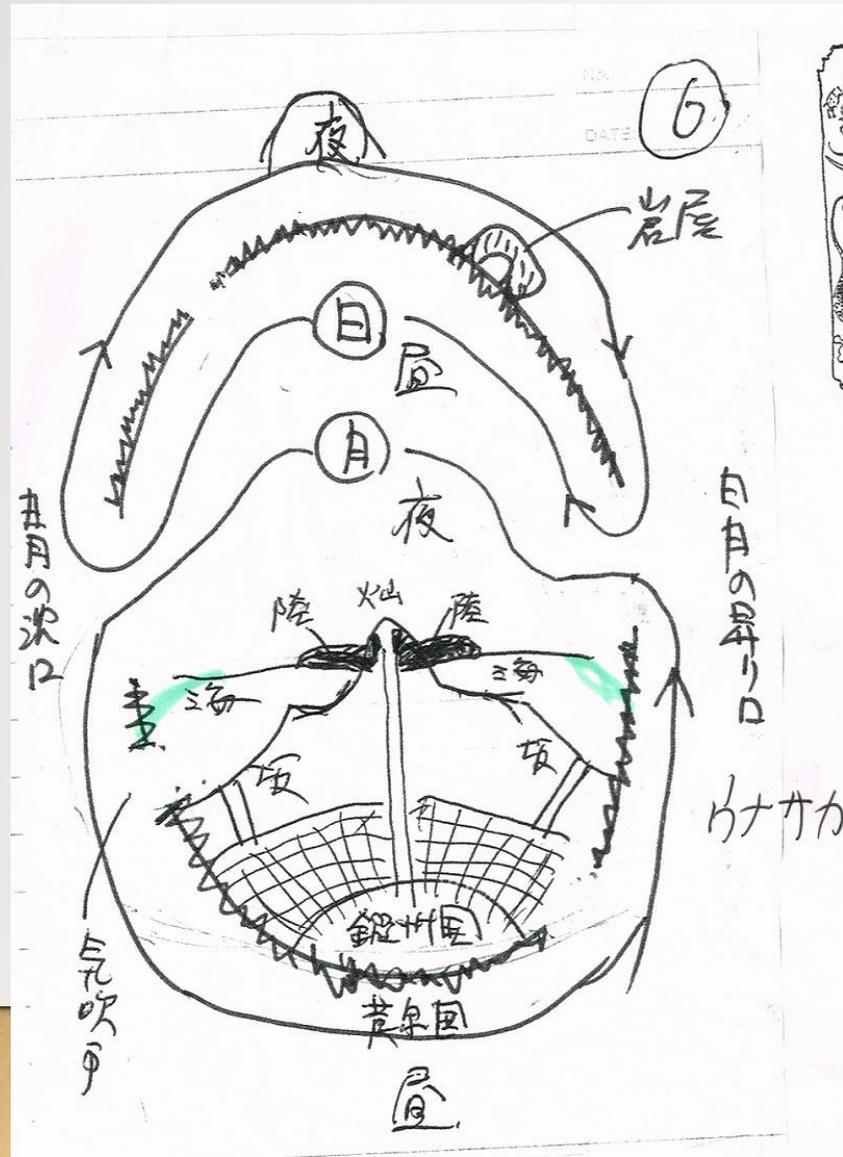
「(死の国におもむく) 月の船の  
恐ろしい姿」

(松前健「死の由来語と月の信  
仰」『日本神話の新研究』。松前  
は「月は人間に死をもたらす恐ろ  
しい神であり、その姿をみること  
はタブーであった」。

太陽の照る現世から出発して月に向かう死の物語  
左手にゴンドラ型の船、その後部に梶をとる男。船の舳先には  
鳥、頭上には二重円(太陽)、一番右には小さな二重円(月)。  
そばには蛙。蛙は月に住む水の精。再生の象徴  
三つの「鞆」とその中に入った矢。これは天神のもつ矢  
真ん中の蕨手文は雷の印



# 天の枕詞「久堅」は契沖のいう通りに「久しく堅し」と理解



- 広畑輔雄「日本古典における神仙説および中国天文説の影響」（『道教研究論集』国書刊行会、1977）

## 原田大六と私説の一致点と相違一試論

- イサナ神 = 鯨説 — ○ (原田は後に撤回するが撤回の必要なし)
- イサナ神 = 雷雲説 — △ (イサナキ雷神、イサナミ竈神 = 火山神)
- 邪馬台国東遷説 (神武東征神話) — ○ (寺沢薫)
  - 『古事記』 韓神・曾富里神 (高千穂) ・白日神 (筑紫) ・聖神 (肥後、阿蘇)
- 前方後円墳壺型説 — ○ (火山のミニチュア。九州からの移動の象徴)
- 太陽受胎説 — △ (天日矛の妻の母。太陽受胎)
  - ただし①一般的には雷光受胎 (辰巳和宏)。②太陽受胎の光は特殊な場と時。後藤明『天文の考古学』225頁)。
- 卑弥呼 (鏡の用途。日迎え) — × 月明を鏡で増幅して光る女。雷神の妻
  - 私説。豊明節会の「豊明 = 月明」。月 = 豊 = 台与は韓国語でtalに対応。